九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

原始箱式石棺の姿相（一）

鏡山，猛

https://doi.org/10.15017/2339197

出版情報：史淵. 25, pp.131-164, 1941-03-31. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

原始箱式石棺の姿相（一）

鏡山　猛

一、序　言
二、資料と分布（以上本號）
三、家族墓としての箱式棺
四、甕棺葬との關係
五、方位の問題
六、原始箱式棺の特性

一、序　言

我が國で、粗石組合式石棺、箱式石棺或は阿波式石棺等と呼ばれる古式墳墓の一形式が各地に亙つて行はれゐる。その最も簡單な構造は、四板の扁平な板石を以て長方形の框を作り、その上に一枚の蓋石を蔽ふもので、その形狀より箱式棺の名がある。而も石材は自然に裂開し易い安山岩、綠泥片岩、頁岩玄武岩等を使用し、略ぼ長方形或は長方形の形を具へる程度で、切石の面を調磨する事のないものが古

式のものとされてゐる。從つて粗製なる語を冠して、實感を現す名稱としてゐる。然しこれは後になると緣面を平直に調へ、組合せ部が石材のみで密着する樣に加工されてゐるものがあり、これ等の石棺は粗製なる語を冠するには不適當である。調製された石棺の年代は顯著な封土の間に安置する所謂高塚式古墳時代のものとされ、廣い意味の箱式棺の範疇に入るけれども、原始的な明瞭な封土を持たないもの或はあつても小規模なものと、時代的に前後が存する樣である。阿波の國に多い青色の綠泥片岩板を以て組立てた石棺によつて阿波式石棺の名が用ひられるのであるが其の地方に於てはやはりやゝ年代の降るものが多い樣である。（註一）茲に取擧げて論じ度いのは、その原始的にして粗製の感ある箱形の石棺で、之を呼ぶには粗製組合式石棺の名が適はしいかも知れぬが、今は箱式棺に原始なる句を冠して、高塚式古墳時代のそれと別に考察を試みるものである。副葬遺物から云へば、金石併用期に中心を置くこの種の棺を取扱つて見やうと思ふ。勿論鐵器及び高塚との組合せによつて、新古を峻別する事は相當困難を伴ふけれども、初期のそれが歐亞大陸にかけての一の特色ある同種の葬法と連關を辿り得る觀點よりして、暫く論を原始發生期のものに限つて見度い。

原始箱式棺は、壯大な封土を持たない事、その大さが屍體を容れるに廣すぎない事、即ち遺骸に棺壁が密接してゐる事、及び副葬品として石器、青銅器を伴ふ事等がその特徵として擧げらるべきであらう。

箱式棺は前述の如く構造簡單であるから、後世に至る迄永く用ひられ高塚古墳時代の初期にはかなり廣く分布し、その末期横穴古墳に迄もその傳統を殘してゐる樣である。（註二）又何等の遺物副葬品も伴はず、

年代判定に困しむものも少くないが、今こゝには次の如き標準によつて古いと思はれるものを抽出しやうと思ふ。

一、關係遺物により金石併用期に相當するもの。――卽ち棺の內外より副葬品として靑銅利器、磨製石劍の如きものを伴ひ、或は彌生式土器を收めたもの。

二、古墳の外貌よりして顯著な封土認められず、先史遺蹟地に存在し、その遺蹟の年代より隔つた後世に營まれたと考へ得ざるもの。我國では特に甕棺遺蹟地に於てほゞ甕棺葬と同期に營まれたと推定されるものが多い。

以上の如き尺度を以て、箱式棺の古い樣相を眺むれば、その分布は日本內地では、西方に限られる狀態を示し、大陸半島方面に點在する同種の石棺と共通する特徵を多々認める事が出來る。西歐の所謂 Stone Cist Buriale が之れに相當し、歐亞大陸の北方に點々として知られる遺蹟によつて、新石器時代末より靑銅器時代にかけて文化的な流動の相が窺ひ得られ、又同じ文化段階に於ける類似の姿相を呈示するが如くに見ゆる點に興味を惹かれるものである。

二、資料と分布

日本

先づ我が國內地に於ける原始箱式棺の資料を、西より東に從つて例示する。箱式棺にしてこゝに採り

上げる諸例は、前述の如き標準によつてなされたものである事は勿論である。

1、對馬國上縣郡佐須奈村大字佐護クビル

丘陵の傾斜面約三十度のスロープに、東西十三尺、南北四尺餘りの削平せられた平地を作り、そこに埋められた一種の箱形の組石中より、細形銅劍、異形青銅器、鐵製鏃先、劍身、土器（彌生土器及祝部土器）等が發見された。後藤守一氏の實査によれば、封土の有無不明であるが、當初小圓墳程度のものはあつたにせよ、莊大な墳墓を想像する事は困難のやうである。遺蹟は不用意に村人のよつて發掘され、遺物も注意して取出されてないから、石棺の構築副葬品の配列の復原に當つても、一抹の疑を拂拭し得ない。後藤氏の報告によれば、東西に長く、一種の石棺樣の構造がある。今東西の二つの部分に分けて觀察が試みられる。即ち、東の部分は長さ六尺幅二尺二寸の蓋石の東端に、幅三尺深さ八寸大の側壁が立てられてゐた。南及北には側石らしいものは見當らなかつたといふ。この西に接して、長さ幅共約三尺位の範圍に、箱形の構築あり、この部分の蓋石は上下二枚宛並べた計四個の板石を以て蔽はれてゐた。兩部を合して蓋石の全長東西九尺七寸五分となる。棺の內徑は東西約九尺、南北二尺二寸許り、遺物の多くは西半部に見出され、東半では、口徑九寸二分深さ一尺一寸二分の青銅容器あり、彌生式甕形の土器もこの部分より採集せられてゐる。この土器は復原すれば、口頸最狹部約一尺一寸餘りの甕形を呈する。この部の中央に存在する青銅容器によつて殘される餘地に於ては、成人屍體全身を收める事が困難である。從つてこの甕に遺骸を容れた所謂甕棺葬の原狀を想像し得られる譯である。甕の破片は殘

片の不足によつて、それが北九州に最も普遍的に認められる二個の合口式のものであつたか、或は單棺であつたか、充分明にし得ないが、若し被葬者が成人であつた場合には、甕の容器から見て、屍體の一部を保護した原始的な形を採つてゐたものとされねばならぬ。かう考ふれば、南北兩側面の側石を欠ぐ事も理解がた易くなるのではなからうか。西方の部分に於て副葬品の多くが發見されてゐる事實は、少しく時代は降ると思はれるが、箱式棺として遺物のみを收める別劃がしつらへられる諸例とも關連が考へられなくもない。（註三）

以上後藤氏の遺蹟の實狀の報告に基いて、最も妥當と考へられる屍體埋葬の原狀を推測した私案を述べたものであるが、この私案については、後述の諸例に參酌して理解される所も多いと思ふが、大方の示教を乞ふ次第である。殊にこの副葬品については、我が金石併用期に於て注目すべき多くの特異なる遺物を含んでゐる點に就いても、考察を要する所が尠くない樣に思はれるが、この點に關しては直接この論文の重點とならぬ故、今多くを述べるのを差控える。

考古學雜誌第十二卷第一號　後藤守一氏　對馬國上縣郡佐須奈村發掘品
同誌第十三卷第三號　後藤守一氏　對馬瞥見記其の二

2、對馬國上縣郡佐須奈村字佐護白岳

白岳の鞍部に箱式棺の群集墳があり、その一は長さ八尺五寸幅四寸七分を算する。一坪内外の小圓墳（石塚）を持つものが多い。明治四十年代の發掘發見にかゝるもので、次の如き副葬遺物が知られてゐ

る。

銅劍、筒形其他異形銅器、鐵製鏃先、土器。これ等の遺物の何れが、どの石棺より見出されたか、正確な原狀を知る事は出來ないが、齊一な石棺の構造よりして、何れも金石併用期の墓相として理解される事に異論はない。

考古學雜誌　第十三卷　第三號　後藤守一氏　對馬瞥見記その二

3、對馬國下縣郡仁位村大字仁位淸原寺原

同じく上揭の後藤氏論文に據れば、大正八九年の頃、箱式石棺內より長さ約八寸の石劍一個を發見したと云ふ。當時墳丘の認むべきものなかつた由である。

4、對馬國下縣郡仁位村大字濱町

丘陵の末端に近く、數個の粗製組合式箱式棺があり、封土を持たない群集墳の樣相を呈し、副葬品の發見記錄等ないが、前例と對考して同期の墳墓と推定される。上揭後藤氏論文參照

5、對馬國下縣郡鷄知村大字高原下ヒナタ

同樣の箱式石棺より、銅劍、鐵劍、土器等の發見が報ぜられてゐる。同上後藤氏論文參照

6、肥前國東松浦郡久里村大字柏崎小字石藏

現東京帝室博物館に藏する著名な有柄銅劍一本と狹鋒銅鉾二本は明治の末年、この地より發見されたと傳へてゐる。その發見時より帝室博物館に收藏される經由については、松浦史料第一輯に載せられた

龍溪顯亮氏の「金石併用期に於ける唐津地方の遺蹟と遺物」に詳かであるが、故高橋健自博士の「銅鉾銅劍の研究」には、和田千吉氏の聞書きとして、粗製組合式石棺より出すとある。この地は龍溪氏によれば、貝塚遺蹟であり、甕棺の存在も認められるといふ。

7、筑前國糸島郡可也村大字稻留小字西辻

昭和十年縣道改修に當り採土工事中、數個の甕棺に交つて一の箱式棺を發掘、その內より磨製石劍が得られたといふ。石劍は粘板岩質の長さ七寸六分の有柄形である。現品は今糸島中學校に保管中。

この地は舌狀の丘陵地が南に伸び、その端部に近い所で、彌生式土器の散布地である。

8、筑前國糸島郡可也村大字井田原字松崎

遺蹟は前例の東約三町の地點である。昭和十年十月實査。同地高松新造氏宅地より二個竝存の玄武岩板石を組合せた箱式石棺を發掘した。何れも南北の同一方向をとり、蓋石は東西兩棺相接する如き近距離にあり、同時葬を思はしめるものがあつた。棺の內法は次の如き大さにして、共に小形棺である。遺蹟は緩かな丘陵地の一地點にあり、副葬品は別に見受けなかつた。彌生式土器の散布地として同時期の如く見受けられた。小形棺なる點や、封土らしきものを認め得なかつた點も、古式箱式棺の特徵を具ふものと云へやう。

A、長さ三尺六寸、幅一尺二寸、深六寸、側石六枚、蓋石五枚

B、長さ二尺三寸五分、幅八寸、深五寸、側石五枚、蓋石二枚

9、筑前國糸島郡前原町大字泊大塚

遺蹟は丘陵上にある圓墳で、もと墳上に社殿あり、大正二年社殿を撤去した際に地下一二尺にして石棺を發見したといふ。故高橋健自博士は現場にて平に朱色の着いた扁平な石を實見せられた故、組合式石棺ならんとされてゐる。この棺内より細形銅劍二口を發見すといふ。又中山平次郎博士によれば、この圓墳の西の尾にも亦圓墳並び存し、墳丘は高さ約六尺に過ぎぬ小圓墳にして、扁平なる石を以てせる粗製組合式の石棺一部露出しその内面は朱色を呈したりといふ。

高橋健自氏「銅鉾銅劍の研究」
考古學雜誌　第七卷　第十號　中山平次郎氏「北九州に於ける先史原史兩時代中間の遺物に就いて」

10、筑前國糸島郡前原町前原

前原西端部の畑地は、彌生式土器を出す遺蹟として早く中山平次郎博士によつて注目されたが、その一角に彌生式の古甕を出した小圓墳あり、それより十間許りを隔てゝ、久しき以前に破壞された石棺材を見受ける事が出來たといふ。石質は結晶片岩にして、扁平なる片面に朱を附した狀態が認められたといふから、箱式石棺の存在が推測される。

考古學雜誌　第七卷　第十號　中山平次郎氏「北九州に於ける先史原史兩時代中間の遺物に就て」

11、筑前國壹岐村大字野方生松原

海岸に近き砂丘地の遺蹟で、彌生式土器石器等の散布地である。大正九年北九州鐵道路線工事中、中

山博士は、松原の南端畑地との境に於て、板石を以て組合されてゐた箱式棺の取壊されつゝあつた狀態を實見されたといふ。

考古學雜誌　第十一卷　第二號　中山平次郎氏「大甕を出せる古代遺蹟」

12、筑前國福岡市姪濱町五頭山

姪濱町の南部にある五頭山（標高二七・五米）の頂にあり、粘土質の丘上に底石を欠ぐ箱式棺、長さ七尺八寸幅二尺蓋石三四枚を並べ、内部には朱痕鮮かに認められ、頭部は枕石の位置より東北北の位置をとつたものと思はれる。副葬遺物として次の如きものを數へるが、そのうち銅鏃は北九州に於て類品に乏しい今日注目すべき品である。

神獸鏡二面、銅鏃四個、鐵劍二口

福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯

13、筑前國福岡市西新町藤崎刑務所前

海岸に近い砂丘遺蹟で、同地村上義雄氏邸内より、昭和七年發掘された。同時に發見された甕棺、及び有文彌生式土器と共に學界に屢々報告され、論議を見たもので、當時取敢ず永倉松男氏が筆者と共同の名で雜誌「考古學」第二卷第一號に「筑前國藤崎に於ける彌生式遺蹟」と題して報文を物されてゐる。こゝではやはり數個の甕棺に交つて、地下三尺六寸に西東に主軸を持つ箱式石棺が發見され、内法長さ二尺三寸、幅中央で六寸、深さ六寸五分といふ小形棺であつた。

猶村上氏は邸内より二個の同種の石棺が發見された由を聞いた。　卽ち前記小石棺より數米を隔てゝ、南北に横はるものと、東西に長軸を持つものとがあり、　この二つは何れも成人骨を容れるに足る大さであつた。　その南北に横つたものゝうちより鏡一面と鐵劍の破片を採集し得た由であるが、今所在を失し詳細を知り得ないのを遺憾とする。　猶この地帶の砂丘は東にのびて藤崎千眼寺前の附近に迄彌生式住居遺蹟を見る事が出來る。　明治十五年同地の川庄岩五郎氏宅地内で發見された石棺も同種のものである。棺は東西に長軸を置き、東枕の成人骨あり、　棺内法長さ六尺三寸幅一尺一寸深さ一尺五寸七分底石なきものであつた。　副葬品として方格規矩鏡一面、鐵直刀一口、環頭大刀一口を得たといふ。

福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯

14、筑前國福岡市東公園

公園内陸軍墓地東方約十間許の砂地に於て實見、棺は他の諸例に見る如き板石でなく、やゝ厚みのある玄武岩の塊石を以て疊んだ小竪穴石室といふ方が適切であるかも知れぬ。　昭和九年實査當時、既に多少石材は破壞されてゐた爲に、　棺形の正確な測定は行ひ得なかつたけれども、原位置を保つ數個の側石より、東西約十尺南三尺位の内徑を持つものゝ如く見えた。　底石を持たず、蓋石は側石よりやゝ大形の同樣の塊石を數個積み上げたものゝ樣である。　棺内より彌生式小坩一個破片となつて採集し得た。棺の方向は東西に長軸を持つてゐた。當初に於ては、海岸に接した砂丘に營まれた原始墳墓と思はれる。

15、筑前國粕屋郡席内村大字鹿部皇石神社

皇石神社は、郡内の平地に臨むかなり急峻な丘陵上にある。社地の丘陵には甕棺墓地があり、そのうちの一つより銅劍を出した事もある。山裾には彌生式土器の散布地や包含層がある。即ち居住地が山麓にあり、墳墓として丘が利用せられてゐる譯である。社殿に至る石段の中腹に箱式棺の一部が露出してゐる。

16、筑前國宗像郡岬村織幡神社

社殿の西方十六間の距離に二基の石棺が大正十年頃よりの社地整理の際、地下三尺にして掘り出された。兩棺共東西の方向を取り、その間隔は極めて接近してゐた。一は内徑長さ六尺、幅一尺三寸、深さ一尺二寸、蓋石四枚を用ひ、他の一は長五尺五寸、幅深さ共に前者と略同大、蓋には六枚の板石を並べ底石は欠いでゐるが、砂利を敷き詰めてあつた。副葬品としては、後者より黑曜石の打製石鏃一個を發見した他には何も認められなかつた。

福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯

17、筑前國嘉穗郡頴田村大字西佐與谷頭

昭和十一年七月道路の傍より露出した石棺あり、平坦な畑地をなす丘陵の突端にあり、表土より一米の深さに現れた。厚さ二寸餘の板石を用ひ、内法長さ四尺四寸七分、幅一尺一寸六分、深さ一尺三寸の比較的小形の棺である。蓋はやゝ厚手のもの（厚さ四五寸）を以て蔽はれてゐる。東西に長く、西の部分に、内行花文鏡一面を收めてゐるのが發見された。蝙蝠形の四葉座紐あり葉の間に「長宣子孫」の銘

を容れ八花文を持つ徑四寸一分の鏡で、その形式より漢代に比定し得る舶載鏡と思はれる。他に遺物を伴つてゐないけれども、古式鑑鏡なる點を考慮して原始箱式棺の範疇に入れて數ふる事が出來やう。

考古學　第八卷　第一號　兒島隆人氏「内行花文鏡を出せる箱式棺の新例」

18、筑前國飯塚市大字下三緒字佛ノ辻

下三緒部落に接する南斜面の丘陵に甕棺があり、東一米を隔てゝ蓋石を破られた箱式棺がある。甕棺は東西に西をやゝ高くして置かれてゐる。

考古學　第九卷　第八號　兒島隆人氏　飯塚市下三緒の合口式甕棺

19、筑前國飯塚市東菰田

彌生式土器を出す遺蹟地でその一角に小石棺と石蓋土壙が發見されてゐる。昭和十六年二月十一日森貞次郎氏の發掘調査によるもので、石棺は内法横七寸縱二尺一寸に過ぎない小形石棺の一として注目される。棺内は相當量の朱がつめられ副葬遺物は何等見當らなかつたが、遺蹟地の狀態より察して彌生式土器の時代に相當するものと考へられる。

20、筑前國嘉穗郡稻築村大字漆生

漆生部落の西南方小山彙中の一小丘上にある小圓墳に包藏される箱形石棺より、夔鳳鏡一面が發見されてゐる。石棺は主軸を南北に置き、左右側壁は各々三枚宛前後各一枚蓋石は三枚の板石を以て組立てられてゐる。寸尺の詳細は不明であるが、鏡を取り出したる者やうやく上半身を入れ、棒にて搔き出し

たと云へば辛じて成人を容れ得る程度と思はれる。墳形の表土より、蓋石の上面迄四尺五寸といふ。鏡は蝙蝠形の四葉座紐あり、葉間に「長宣子孫」の銘を置き、周邊は花文を以て終るもので、形式から推して漢代の舶載品たる事疑ひない。他に遺物はなかつた由であるが、その鏡の製作年代を假にとつて古式の棺のうちに數へる。

考古學雜誌　第十七卷　第二號　柴田喜八氏「筑前漆生の古墳群」

21、筑前國八幡市高槻七條

七條通東側台地地均工事中掘り出された組合式石棺二基あり、一基は八幡中學に移置されてゐる。長さ六尺餘幅一尺三寸深さ一尺餘粗末な自然石に近いものを用ひ、丹が內面に塗られてゐた。副葬品は見當らなかつたが、土地の者の言によれば、この台地にはなほ多くの石棺があつたが、住宅を建てる際破壞されたといふ。猶附近は彌生式土器散布地として知られてゐる。

北九州鄉土史研究　第二輯　石村一男氏「北九州新發掘遺蹟」

22、豊前國小倉市上到津屏ケ坂

前記高槻の東隣の到津台地には、甕棺と伴つて數個の箱式石棺が發見せられてゐる。近時小倉市の道路工事で地下げが行はれた際、畑の崖の面に一部を露出し、副葬品はないが、彌生式土器が同一層にあり、石庖丁、彌生式土器の高杯等が石棺に接して採集されてゐる。石棺の埋められた方向は凡て東西の向を採つてゐる。

北九州鄉土史研究　第一輯　石村一男氏「八幡市を中心とする先史及原史時代の研究」

23、筑前國朝倉郡甘木町圓山公園

甘木町の北にある小丘陵である。この地よりは甕棺の發見があり、猶箱式棺の發見も左の報文に見えてゐるが、現に朝倉中學に移置した石棺一基あり共存の甕棺と共に配置されてゐる。人骨は少年のもので耳の邊りに鐵鏃を伴つてゐたといふ。方向は東西位にあり。

考古學雜誌　第十八卷　第八號　坂本眞鈴氏「金石併用時代に於ける兩筑平野」

24、筑前國朝倉郡福田村大字栗山

栗山部落の東北約二丁の畑地に於て、一ケ所の棺式石棺を中山博士が實見せられてゐる。用材は附近の立石村柿原に見られる綠泥片岩を用ひ、内に朱痕を止めてゐた由である。以前村人によつて棺内より人骨と鐵鋒長さ一尺に近きものが取り出されたといふ。この附近一帶は彌生式遺蹟地で、甕棺も亦相當に見出される。

考古學雜誌　第十五卷　第四號　中山平次郎氏「筑前國朝倉郡福田村平塚栗山新發掘の甕棺内遺物」

25、筑後國三井郡太刀洗村大字小隈字塚

太刀洗飛行場西端に近い丘陵性の台地に甕棺墓地があり、昭和九年頃土採り工事中數多の甕が掘り出されたといふ。現に二個の甕棺と並んで一つの箱式棺が露出してゐる。甕棺との距離僅かに九尺餘り、既に前壁を失つてゐるが、現存部北壁で二枚の板石を立て並べ、四尺六寸、南壁で三枚三尺四寸、幅前

方で一尺四寸、奥は次第に狹まり、奥端に於て兩壁合する狀態にあり、奥壁を欠ぐものゝ如く、箱式棺としてはこの點異態である。地表より蓋石上面迄四尺八寸、蓋石下より下底迄一尺六寸六分、封土底石共になく、石材は綠泥片岩を以て組合する。昭和十三年十二月實査。

26、筑後國三井郡三國村大字横隈

甕棺群集址として中山博士の踏査を經、後坂本眞鈴氏によつて銀象嵌の青銅鞘形器を出した箱式石棺の報告がある。中山博士によれば浦市太郎氏宅地内よりかつて數個の箱式棺が掘り出されたといふ。石棺内に朱がつめられ人骨の殘存するものもあつた由を傳へてゐる。

考古學雜誌　第十一卷　第二號　中山平次郎氏「大甕を出せる古代遺蹟」

考古學雜誌　第十八卷　第八號　坂本眞鈴氏「金石併用時代に於ける兩筑平野」

27、筑後國三潴郡三潴村大字塚崎

御廟塚なる名稱を持つ徑五六間と推定される低い圓墳は、かつて寛延二年一農夫によつて發掘され、棺上に細形銅劍二口を掘り出したる由「筑後將士軍談」に見ゆる。棺は終に開かずして、もとのまゝ埋められたから、詳細を知る由もないが、この種の銅劍を出す他の遺蹟の例から推して箱式石棺と推定される。封土には多量の貝殼と彌生式土器、黑曜式石片等を含み、貝塚の遺蹟の上に營まれた原始墳墓であることを示してゐる。

考古學雜誌　第二十卷　第一號　中山平次郎氏「塚崎西畑の御廟塚」

28、筑後國三潴郡三潴村大字高三潴

前記塚崎より西方高三潴の畑地に亘る數町の畑地は、筑後に於ける代表的彌生式遺蹟地として、豊富な遺物を出土してゐる。甕棺も相當多量に見受けられ、その最も著しい所は、小學校前の畑地であつて以前は畑の斷面に合口甕棺や單甕が露出してゐたが、今は地下げが行はれて一様に平地となり、實見する事が出事ない。それ等の甕棺と並んで露出してゐた石棺の原狀は、考古學雜誌第二十二卷第十一號の口繪に寫眞が掲られ、同誌に山本博氏の「筑後高三潴の遺蹟に就いて」なる論文があり遺蹟の概要が報ぜられてゐる。今この畑地の西端に、これも近年地下げが行はれた結果露れたのであるが、一小石棺が畑の斷面に一部を殘して現れてゐる。現存部側壁の長さ約二尺幅一尺、深さ約八寸である。下底は精良なる粘土を一寸許りの厚さに敷きつめてあつた。方向は前記寫眞に見ゆるものと同じく東西に長軸を持つものである。

29、筑後國浮羽郡船越村大字秋成

遺蹟は筑後川流域平野の中にあ高燥の畑地にあり、甕棺多數を出してゐるが、島田貞彦氏等の調査があり、人類學雜誌第四十三卷第十號に載せられた「北九州に於ける甕棺調査報告」に於て、左の如き說明をされてゐる。

「土地の人古賀敬太郎氏其他の語る所を綜合すると、本例（實地發掘の甕棺）の北方に於て、東西を主軸とする、側壁約五尺內外の粗製組合式石棺を發掘し、その中には本例（深さ二尺五寸程度の二つの

甕の口を合せたる埋葬例）のものよりやゝ大なる合口甕棺存在し、その周圍には粘土を以てつめたとされる。組合式石棺内に甕棺を容れたる例此の例として興味ある研究をもたらすものといはれる」

人類學雜誌　第四十三卷　第十號　島田貞彦、水野清一「北九州に於ける甕棺調査報告」

30、筑後國八女郡岡山村岡山及龜甲

中山博士の實地踏査された甕棺の遺蹟地である。博士は土地の農夫よりの聞書きとして、この附近の畑地に於て、甕棺の他薄き板石を以てした長方形箱形の構築物を發掘すとの事を述べられ、且つ箱式棺の板石の取り壞されたるものを實見せられてゐる。

考古學雜誌　第十一卷　第十一號　中氏山平次郎氏「大甕を發見せる古代遺蹟」

31、肥前國三養基郡鳥栖驛構内

中山博士は同上の論文に於て、鳥栖驛建築工事中構内より及びその裏字森國方面にかけて、甕棺が掘り出だされ、又薄き板石を以て長方形に箱の如くしたるものを見出したとの聞書を記錄されてゐる。

32、肥前國三養基郡中原村大字原古賀ドンドン落

幾多の甕棺に交つて一小石棺が檢認された。内徑にして長さ二尺一寸、幅一尺五分、深さ約一尺。蓋石及び側石は厚さ五寸位の板狀安山岩を用ひ、接ぎ目は粘土を以て張り底面は粘土を敷く、耕土表面より深さ約四尺主軸は東西に向ふ。

松尾禎作氏「東肥前の先史遺蹟」

33、肥前國神崎町仁比山村大字城原朝田キリハタ

是も小形棺で長さ二尺幅一尺深さ四五寸の箱式組合棺内より鐵劍一口が檢出せられてゐる。劍は長サ一尺八寸にしてクリス形銅劍の形をとり、材料を鐵とするも形式は劍銅の型を踏襲するもので、古式の劍と云はねばならぬ。

松尾禎作氏「東肥前の先史遺蹟」

34、肥前國神崎郡三田村郡境

三養基郡との境にあたり、夥しい甕棺群落地の中に一個の箱式石棺あり、東西に長さ約五尺四五寸、幅一尺乃至一尺三寸、側壁及び蓋石の接合部及蓋の上部は粘土を以て充塡されてゐたといふ。

松尾禎作氏「東肥前の先史遺蹟」

35、肥前國小城郡多久村東原

丘陵地に箱式石棺群集する所あり、多くは南北の方向をとり、一棺は東西に横たはつてゐた。五六坪の平地より石棺五基を發見したといふ。又二十餘年前二十數個の同樣の石棺を出したと傳へてゐる。石棺群集墳墓として注目すべき遺蹟である。

松尾禎作氏「東肥前の先史遺蹟」

36、肥前國北高來郡有喜村六本松

これは繩文土器を出す貝塚遺蹟より發見せられた石棺で、且つ石棺内の人骨の觀察によつて見るも石

器時代人の特徴を具へると云はれてゐるから、一見石器時代に屬するものゝ樣で、他の遺蹟の例よりも極めて古い樣相を持つものである。然し猶この點に關しては純石器時代のものと見做されるか疑問とされてゐるので最後に一言する。この貝塚及石棺は大正十四年故濱田耕作氏等によつて發掘されて、人類學雜誌に發表された論文がある故次に石棺の說明を引用する。

第一石槨は表土下約一尺にして其の上端に逢着したが、長軸を略東西に向け、長さ五尺强、幅約二尺五寸の長方形の區劃を扁平な安山岩板を以て界してゐる。石材は主として自然の劈裂を利用し最小の加工をなした厚三寸內外長さ二尺前後、高さ一尺强のもので、長側壁壁は二石以上から成立して居つたが發掘の際に不注意に取り去られた爲め其一半を明にする事が出來ない。石槨の內部は石壁の上緣から五寸强の處まで黑い表面の土壤が充滿し、其れより以下は只層となつて居り、其の石壁の左右には何等土壤の混入を見ない。而して人骨の置かれた底部に指頭大の美しい小石が數多く敷かれてあるのは、槨底の用意として豫め設備せられたものであつて、其の代り底石は始めから之を缺いで居つたものである。又た蓋石も此の石槨には全く其の存在を認めないのみならず、此等の點は次の石槨に於いても同樣であつた。なほ石槨壁の隅角及び接合部等には別に小形の石板を置き、或は粘土を塡めた處があつて石槨保强に注意せられた事が窺はれる。

此の石槨內の人骨は第二號人骨と命じたものであつて、頭蓋は槨の西隅にあり、骨磐は略ぼ槨の中央部に見出されたが、之と連絡する下肢長骨は西方に延びて居た。併し是は甚だ不自然な位置であつて、

頭蓋は此の場合寧ろ東方になくてはならないと思はれる。何故に斯くの如き錯倒の位置に各骨が存在するに至つたか、甚だ迷はざるを得ないのであるが、後世攪亂移置せられたとも遽に考へられない。此の人骨の頭蓋と四肢骨の一部は稍々保存の見るべきものがあつたけれども脊骨は殆んど其の痕迹さへ明かでなく、肋骨は略ぼ同様であつた。清野謙次博士及び宮本博人君の鑑定に據れば、是は中等大の熟年の女性骨に屬するとの事である。

第二石槨　是は前石槨の北方約四尺の處に於いて發見せられ、同じく東西に長軸を向け、その東壁を缺失してゐたが、現存部長さ約四尺五寸幅一尺五寸弱、細長い長方形をなしてゐる。石材は矢張り前者と同じ安山岩板であつて側壁は半ば或は其れ以上貝層中に沒してゐた。內部には胸骨かと思はれる部分の人骨の痕迹を僅かに認め得たに過ぎない。此の石槨の底石及び蓋石を欠いでゐる事は前石槨と同様である。」

扨右の如き一見石器時代の遺蹟に於ける箱式棺の存在を示し、特異の例を示すかの如くであるが、この石棺の近くに接した土層中の仲展葬人骨の肋骨下より一個の鐵鏃が發見せられ、これは後世の混入でなく、人骨と同時的なものとされてゐる。この遺蹟に於ては何等金屬文化を示す様な他の遺物を持たないから、或は他の部族によつて之を受け殺害されたものであるとの推察さへ廻らされてゐる。果して然らばこゝに石器時代の文化に低迷しつゝあつたこの部族の生活當時、更に他處ではかゝる進出した鐵鏃を使用した部族の存在が想像され、所謂金石併用期に於ける新舊兩面の對立が、同時的に了解せられる

好例として興味ある資料となるのである。從つてその棺內人骨が鐵鏃を伴つた人骨に似て體質的に古い相貌を保つたにせよ、それは文化段階の方面から見て純石器時代のものと想定するに困難を感ずるのである。

民族　第一卷　第一號　濱田耕作氏「石金兩時代の過渡期の研究に就いて」
人類學雜誌　第四十一卷　第一號及第二號　濱田耕作氏「肥前有喜貝塚發掘報告」
人類學雜誌　第四十一卷　第十二號　宮本博人氏「肥前北高來郡有喜村字六本松貝塚より發見せられたる人骨に就きて」

37、豐前國宇佐郡長洲町大字金屋字廟森

故高橋健自博士の聞書きによれば、明治二十年頃道路改修中一圓墳に所在する板狀安山岩を以て構築された箱式組合石棺現れ、內より細形銅劍一口、鐵劍一口、及彌生式土器等等を出すと云ふ。

高橋健自氏「銅鉾銅劍の研究」

38、豐前國西國東郡高田町大字美和字雷

明治四十年頃既に發掘せられたものを、後高橋健自博士によつて實地踏査されしもの。高さ六尺餘りの一小圓墳に、安山岩の割石を以て長さ五六尺、幅二三尺の箱式石棺が存在し蓋石は二枚の平石を並べ底石なく棺は南北の方向に置かれてゐたといふ。棺內南方にクリス形廣鋒銅鉾二口を收めたといふ。

高橋健自氏「銅鉾銅劍の研究」

39、長門國豐浦郡安岡村大字富任字梶栗濱

大正二年十一月鐵道線路布設工事中地下二尺餘にして組合式粗製箱形石棺現れ、底は六枚の平石を敷き、蓋は三枚の平石を並べたものといふ。棺内より細線鋸齒文鏡一面、細形銅劍二口、及び彌生式土器を發見。封土なく石棺は長さ六尺幅二尺一寸高さ一尺五寸略ぼ北々東より南々西に長軸を持つ。

高橋健自氏「銅鉾銅劍の研究」　考古學研究　第二輯　森本六爾氏「長門富任に於ける青銅器時代墳墓」

40、周防國山口市吉敷赤妻

山口市街の方向に向つて伸びた丘陵の端に圓墳あり、刳抜式船形石棺と箱式石棺が發見された事がある。但しこれは原始的な箱式棺の範疇に入れる事を得ない樣である。この古墳から東百米足らずの所より、桑畑を墾くうちに組合式石棺三個を出土したといふ。石材は何れも綠泥片岩の厚さ一寸六分乃至二寸六分の板狀を呈する。詳細な大さは畏友山本博君の實査當時は既に破壞された後であつたから知り得ない。右の石棺のうち一基は一個の竪穴に連續し、その竪穴壙底より彌生式土器破片を埋藏してゐた事實より推して、ほゞ同時代のものと推定され、こゝに古式の箱式棺の例として擧げる譯である。この桑畑は凡そ二三畝あり、他の小路の傍にも一石棺露出せる所よりすれば、この畑地一帶が箱式石棺の群集墳墓でないかとの想像を禁じ得ない。

考古學雜誌　第二十七卷　第十號　山本博氏「山口市吉敷附近の彌生式遺蹟」

41、周防國吉敷郡大內村大字御堀字御堀

山口市の東南郊外南面する丘陵地の突端に當つて三個の箱式石棺が數米を隔てゝ露出した。その一は

東西に長軸を置くもので、南北兩側石各四枚、東側壁一枚、東側壁二枚、蓋石六枚を以て組み立てられてゐたといふ。同一層位に於て彌生式土器が發掘されてゐる。又この地に發見された密接する一つの箱式棺と、一つの石蓋土壙とは、種々の意味で興味ある資料を提供して呉れる。兩者共山腹の斷崖に露出せるもので既に前半は崩壞し去つて、後半部殘存するに過ぎない。現存部に於て石棺は左右奥壁共一枚宛、蓋石二枚の綠泥片岩の板石を殘し、地表より蓋石迄一尺三寸餘、幅約一尺、長さ一尺五寸餘の內法を持つ。方向は正しく東西に横はるもので、この石棺の南に同じ方向に平行する石蓋土壙あり、相接する側壁の距離僅かに三寸三分に過ぎぬ。土壙の蓋石は、石棺と同様なる綠泥片岩を用ひ、今一枚を殘すのみである。地表よりの深さ六寸六分にして、土壙の幅深さ共に石棺のそれに同じ様である。因に石蓋土壙はかつて中山平次郎博士によつて筑前國雜餉隈彌生式遺蹟より檢出せられ學界に古式墳墓の一様式として始めて提唱せられたもので、此處に前掲筑前東莵田の例と共に年代及び構造の上から密接なる關連ありと思はれる箱式石棺と共存する實例が呈示せらるゝに至つたのである。猶この附近より採集せられたる板石四十餘枚附近の煉瓦工場に見えたりといへば、元來相當多數箱式棺の存在した事と思はれ、彌生式土器と伴ふ原始箱式棺の群落墓地たるを推察するに難くない。

考古學雜誌　第二十六卷　第三號　及び　第二十六卷　第八號　山本博氏「周防御堀出土の彌生式遺物」

42、伊豫國宇摩郡妻鳥村字東宮山

高橋健自博士の實査によれば、丘陵上に造營せられたる一小圓墳に存する箱式組合石棺あり、副葬品

として、狹鋒銅鉾一口、彌生式土器及び琴柱形石製品の原型と關係あるらしきものが擧げられてゐる。

高橋健自氏「銅鉾銅劍の研究」

以上煩雜乍ら遺蹟の簡單な紹介と石棺の方位及び大さの判明するものを羅列して四十二例を得た。今之を國別にすれば凡そ左の如き數が擧げられるであらう。

對馬	五例
筑前	十七例
筑後	六例
肥前	七例
豐前	三例
長門	一例
周防	二例
伊豫	一例

卽ち對馬を渡として九州北部の四ケ國に中心を置きこれに接した中國及四國の一角に數例を見る現狀である。分布中心たる北九州のうちで就中筑前に最も豐富な發見例がある事を注意せねばならぬ。この分布區域は甕棺の所在中心地區とほゞ一致し、青銅器文化ことに銅劍銅鉾の主要圈內にある事が看取される。甕棺との共存關係は特に著しい事實で全分布區域より云へば南方肥後の方面に及ばず、反つて本

土に箱式棺の進出を見るのであるが、兎も角兩者の關係は相當重要な吟味を要するから後節に於て更に立入つて論ずる事とする。

扨上例の構造から概觀すれば長門國梶栗濱の如き例外はあるがほとんど凡て底石を欠ぎ大部分は地磐を削平して棺底となし、間々粘土を敷き或は砂利を並べたものもある。石材の接合部に於て粘土を充塡した諸例も認められてゐる。封土に就いては小圓墳程度のものもあるが、それ等は徑に比して高さ低く所謂高塚の原始形態をなしてゐるに止まる。而も分布周邊に於てその實例が見受けらるゝ。

朝鮮

北九州と一葦帶水の地にある、金海の貝塚は內地金石併用時代の文化相と密接な關係ある遺蹟として、古來注目されてゐた所であるが、昭和九年十二月貝塚の丘陵上にあるドルメンの南方にあたつて甕棺箱式石棺等の新發見があり、甕棺の副葬品石棺の配列等に興味ある新資料を提供して、學界の注目を惹いた。未だ正式の報告書に接しないが雜誌「考古學」上に揭げられた榧本龜次郎氏の書簡によつて大略を知る事が出來る。(註五) 卽ち南の斷崖に接して、五個の石棺が何れも東西に橫はつてゐる。この石棺群の北を限つて、平石を四枚積みにした石壘が東西に長く築かれてゐる。石壘は石棺の上面よりも高くなりその南にある最大の石棺內よりは、磨石鏃二個土器一個が檢出された。他の石棺は略圖によれば皆小形棺で、副葬品は見出されてゐない。石壘の北一間許りの所にある甕棺の下からは、細形銅劍二口尖頭形

銅器等が現れ、かゝる遺物の上からも北九州と大陸の青銅器文化をつなぐ重要な鍵を與へる感がある。

かゝる箱式棺の存在は、半島の南北に亘つて分布するもので、間々副葬品として磨製石劍や磨製石鏃を出す事が知られてゐる。今その二三を例示すれば

地名	副葬品	文献及調査者
全羅北道鎭安郡上田面	石劍	鳥居龍藏氏
忠淸南道扶餘郡縣內面鳳凰山	石劍、磨石鏃	同
忠淸南道牙山郡屯浦面屯浦里	銅鉾劍、土器	大正十一年度朝鮮古蹟調査報告第二册
江原道陽口郡南面松遇里	石劍、石鏃	考古學雜誌 二八ノ二 有光敎一氏
江原道寧越郡下東面角洞里	石劍、石鏃	同「朝鮮江原道の先史時代の遺物」上

以上は顯著な封土を持たず、地中に埋められた石棺の諸例であるが、半島に於ては更にケールン（積石塚）、ドルメン（支石墓）と關連して、一種の石築構造の地表架工を持つ石棺の所在が目につくのである。卽ち積石塚に於ては人頭大の石を積み、圓墳狀の隆起が地表に顯れその內部には箱式石棺を包藏する如き例が擧げられ、江原道春川郡新北面泉田里の積石塚內の板石組合箱形棺よりは、石劍石鏃等の磨石器と管玉が檢出され、それ等遺物は他の箱式棺と共通な趣を呈示してゐるのである。

又支石墓（ドルメン）の所在は全鮮にあまねく見る所であるが、これも亦箱式棺と密接な關係が見られる。北鮮に例の多い卓子形の支石墓は、四枚の大板石を組合せ更に大きな一枚の蓋石を載せる石棺形の石室を形成するものである。南鮮に多い巨大な塊石を天井石とし（撑石）、之を支へる三個乃至六個の

塊石（支石）によつて形成された支石墓に於ては、その中央に別に箱形石棺の構築あり、撑石と支石は之を保護する役目をなしてゐる。更に又所謂南方式と稱ばれる支石墓にして支石なく巨大な塊石を地表に露してゐるものは、箱形棺の幾つかを含む一種の墓標の役をなしてゐるものゝ如くである。この様な狀態は京城帝大教授藤田亮策氏等の大邱府に於ける支石墓の發掘調査によつて明瞭な相貌を現したもので、その概要は昭和十一年度及び昭和十三年度の朝鮮古蹟研究會の調査報告書によつても窺知される。即ちそれ等の塊石の直下には石室等の設けなく、一個乃至四個の石室は東西或は南北位に築造せられ、其上にケールン狀に塊石を以て覆ひ、更にその中心に巨大な塊石を安置してゐるのである。塊石はこの場合石棺被覆の保護的な役目をもたず、一種の墓標として所用せられ、地表に現るゝ効果を慮つて、上面平たく廣く下面の狹小な石が用ひられてゐる。而して塊石下の川石を以てする積石の間に埋存する石棺は、底に板石を敷き、四周も扁平なる粘板岩を以て壁を作り、板石を覆ふ一般の箱式棺形式のものと左右の兩壁のみは川石を以て小口積に積み上げるもの、及び底面及び四壁共川石を以て疊む三つの形式が知られるが、何れも遺骸を收める程度の大さでたゞ石材の差異によつて生じた細別であり、年代的な前後は認められない。ことに副葬品に於ても、その然る所以を示してゐる。即ち石室外には稀に土器片を見るも他に、遺物の埋存なく、石棺内よりは石劍石鏃土器の三種に限られてゐる。石劍は何れも粘板岩製の闊に突起を有する扁平なもので利器としては適當でない。石鏃も同質の石を以て、柳葉形に磨研されたものである。これ等の遺物よりして、金石併用期の文化相を呈示する事が察知せられ、他の積石

塚、北方式支石墓、甕棺とほゞ年代を等しくし、且つその構造自身よりして、積石塚支石墓との複合的な構成を持つ事が云へやう。

滿洲シベリヤ方面

滿洲に於ける石棺は間々報ぜられてゐるが、やゝ進化を見せたもので、この場合に例證する事は出來ない。又ドルメンも卓子形のもの分布し磨石器の發見も報ぜられてゐるが、原始箱式棺の適確な墓地としては熱河方面が獨り明にされてゐるのみである。即ち熱河の一都會赤峰がその著しい例である。

赤峰（烏蘭哈連）なる地名によつて生じた紅山は、市街の東北に屹ゆる標高六九〇米の高山で、その山麓地は先史時代以降の聚落地として知られてゐる。山すその傾斜面一帶に箱形の石棺が存在してゐるのであるが、特に北方紅山後の緩傾斜をなす台地一帶は、この種の石棺の最も多く分布する地域である。この地を訪れた學者によつて學界に紹介されたものがない譯でなかつたが、（註六）昭和十年五月故濱田耕作博士を主班とする東亞考古學會の詳細なる調査があり、その成果は「赤峰紅山後」なる報告書によつて公表された。本項に於て述べる遺蹟の概況も、同書の記述の範圍を多く出るものではない事を斷つて置く。

この地方では現に亂掘によつて石墓の殘骸が人骨土器破片と共に散亂してゐると云ふ。又その附近に散布する遺物は、住居遺蹟の所存を示し、その民居と墓地とのの關係を物語るものとされてゐる。東亞

考古學會ではこれ等の古代聚落の住居趾を探掘すると共に古墳二十六基を發掘調査し、その結果が明細に記錄せられてゐる。古墓は何れも粗末な板石を以て、地下に簡單な箱形の石室を構成するもので、墳丘も現存では認められず、地表に於ける立石列石等も見當らぬものである。大さは大小長幼の身長に應じ、伸展葬を行ひ行る程度のものである。石棺は埋葬時現場に於て組立てられるものと覺しく、棺壁も遺骸に密接した小規模のものである故、我が國の粗製組合式石棺に構造が一致してゐる、石材は最も手近な紅山の岩核をなす赤褐色の岩塊を利用してゐる。それも正しい裂開切截を行はず、粗笨な岩片を用ひてゐる。そのうちには割合に扁平な板石を以て周壁蓋石となしたものや、餘り扁平でない岩塊を積累ねたものがあるが、內面に於ては箱形の狀況を呈する事に變りはない。たゞ天井石に塊石を累ね上げてゐるものは、多分に積石塚(ケールン)的な樣相を呈する點が注目される。

底石は平石を並べ敷くものもあるが、寧ろこれの無い方が多い。遺骸は凡て土葬であり、伸展葬である。仰臥と左右橫臥ほゞ同數を占め稀に俯臥が認められた。主として頭部を東に置き、偏向は南或は北へ二三十度の範圍を出でない。自然石棺は東西に長軸を持つことゝなり、北面する山腹の傾斜方向とは直交する事となる。

次に副葬品としては、鬲、壺、鉢等の形をした赤色研磨土器多數、土製品として紡錘束一個、石器として有孔石斧一個、骨製品として鏃錐、青銅器として鏃釧鐶、裝身具として棗玉小玉等が擧げられてゐる。

右の如き加工品の他に、獸骨が相當頻繁に發見せられてゐる。種類は犬八例、牛三例、羊五例、鹿二例、豕一例となつてゐる。これは牧畜の民業を暗示すると共に、屍者に對する殉葬或は供肉の意味を持つ儀禮的な埋葬と思はれる。又性別に副葬品を覗ると、玉類は多く女性骨に伴ひ、その佩用位置個數よりみて日常の裝身具であり、特に埋葬品に附加したものでない事が窺はれる。之に對し鏃は多く男性骨に伴ふ。總じて土器一個に、利器一二種、若くは裝身具若干といふ程度で、さして優秀なもの或は豐富な財寶を收めるといふ譯ではない。

熱河赤峰石棺の示現する文化（之を報告書では赤峰第二次文化と呼ばれてゐる）と周邊文化との關係及び年代について次の如き結論が述べられてゐる。

「斯の如くにして赤峰第二次文化はその遺物のみならず、墳墓の形式にもやはり北方の系統をひいてゐる。つまり綏遠青銅器文化の一變種である。その東端の一族である。――また前にも暗示した樣に、赤峰石棺の形式がドルメン、ケールンへの契機を持つてゐるとすれば、この滿鮮に擴がるドルメンやケールンに最も近い親緣として注目されなければならぬ。――最後にこの文化の年代に就ては先づ綏遠式青銅器の年代が考へられるのであるが、この事はこの地方より出土する明刀錢等から推して、赤峰第二次文化は秦式と併行するものとなす可きである」

以上の如き赤峰の石棺に類似するものが、同じ熱河省より報告されてゐる。天津北疆博物館の Emile Ricent 師の調査による熱河省圍場の東家營子の遺蹟がそれで、（註七）同師は五基ばかりの箱式棺を發掘されて

ゐる。やはり頭を東にした石棺で石の槌斧、青銅の刀子、錐、飾小金具鳥骨小玉赤色磨研土器等の副葬品を檢出せられてゐる。又三基の墳墓には遺骸の右頰の部にあたつて、犬の下顎骨が埋葬せられてゐたといふから、年代文化生活內容等の點についても前記赤峰の遺蹟とほゞ同一樣相とみとめてよい。(註八)

扨熱河の石棺についてその起原を求める時問題になるのは、シベリヤ及びロシヤに於ける石棺である。前述の如き赤峰文化の淵源を北方に求めらるゝ原因も、一は棺の構築に見受られる通性がシベリヤ及び東露に於ける同類の遺蹟が僅か乍ら報ぜられてゐる故を以てゞある。

シベリヤに於ける遺蹟例はミヌシンスク(Minoussinsk)地方に於ける家族墓がそれで、墳丘は直徑二三十米より三四十米の大きいものであるが、高さ半米位の極めて低いものである。封土內に數個の石棺を收め、地表には墓域を劃する列石や石の隅柱等がある。何れも西南より東北の方位をとる。(註九)

次に東露ではアナニノ(Ananino)の遺蹟に於て、地表に墳丘を持つ箱式棺の群集が報ぜられてゐる。(註十)

兩地方共土葬の他に火葬あり、身體の一部を埋葬した部落葬も行はれてゐる。板石圍ひの箱形の小石室を作る原則には變りないが、若干の木材架構の痕跡の認められるものもある。埋葬遺物は熱河の例に極めて類似し、斧頭、鶴嘴、短劍、刀子等の利器、飾小金具、釦等の裝身具、獸骨等の發見も一致してゐる。但し熱河に稀に認められた石斧の如きものなく、金屬器も鐵と青銅が併用せられてゐる。提砥土器の如きは共通する遺物と云へやう。

歐洲

ヨーロッパに於ける箱式棺は、新石器時代末期より青銅器時代にかけて、盛行を見せてゐる。（註十一）此處でも顯著な地表の封土や墓石を持たない事を特徴とするが、間々ドルメンの中央石室の周圍に數個發見されることがある。一般にこの種の石棺は Cist 或は Stone Cist の名を以て稱ばれてゐる。分布の中心地をなすのはフランスで、各地方の墓地では、幅四十糎乃至六十糎長さは被葬者の身長に應じて伸展葬をなし行る程度のものもあり、又座葬屈葬等も行はれてゐる故、その葬法に應じて短いものもある譯である。以下二三の遺蹟を例示すれば

Ile de Tihinic (Morbihan)——人骨を殘す棺によつて見れば、屈葬或は伸展葬あり、一人或は二人多きは四人の遺骨さへ見出された。頭は南或は東南に向ふ。棺內に石器或は土器を伴ふ。

Maupas (Vienne) 一體乃至五體の遺骸を收む。磨製石斧土器を副葬す。

Chanac 大部分は屈葬の一屍體を容れ、頭部は東或は北に向ふ。或るものは二體、或は三體を順次合葬するものもある。石棺よりは青銅長劍が發見されてゐる。又磨石斧の副葬もある。

瑞西に入つては Lausanne 附近なる Chamblandes の遺蹟は箱式棺墓地の好例として引用せられる。一の墳墓に五乃至七の棺を含むもので棺は東西の方向をとつて構築されてゐる、長さ一米幅深さ共五十糎位の大さで、ほとんど凡ての棺に男女二體の遺骨を見出すのが普通である。男子が最初葬られるのが通

例で、中には五體に及ぶものさへある。遺骸は常に屈葬の狀態である。獨乙に於ても新石器時代の文化相を持つ箱式棺が知られ、英國に渡るとイングランドでは Beeker tomb なる名稱を以て呼ばれる新石器時代より青銅器にかけての箱式棺の葬法があり、(十二)更に海を超えた Green land に於ても、新石器時代中期に屬する箱式棺が注意されてゐる。一方南方エーゲ海方面に於ても、青銅器時代の遺物を伴ふ同種の棺の存在が報ぜられてゐる。

以上歐洲に於ても南北に廣く分布傳般してゐる樣が瞭であらう。

(註一) 阿波式石棺なる名稱の提唱に就いては左記の論文がある。この名稱は一般箱式棺の名稱としては適當でないが今日迄相當使用せられてゐるので特に玆に記して置いた。
考古學雜誌 第四卷 第四號 笠井新也氏「阿波國古墳概說」

(註二) 横穴古墳内にしつらへられた箱式棺の一例として相模國高座郡芽ケ崎町甘沼の遺蹟が擧げられる。
考古學雜誌 第二十九卷 第八號 赤星忠直氏「組合式石棺を出した相模國甘沼横穴群について」

(註三) 原始箱式棺の分布地域では左記の如き實例を見る。
筑前國宗像郡田島村上高宮
筑後國大牟田市延命寺公園内
而して前者よりは甲冑、直刀等の副葬品あり後者よりは小鐵劍の發見あり共に初期古墳期のものと想定される。同樣の構造を持つ棺は畿内の方に迄及んでゐる。

(註四) 考古學雜誌 第二十二卷 第二號 中山平次郎氏「筑前雜飼隈の石蓋土壙及無蓋土壙」

(註五) 考古學雜誌 第二卷 第六號 榧本龜次郎氏「金海貝塚の新發見」

(註六) 東京人類學教室八幡一郎氏、滿洲醫大黑田源治氏、天津北疆博物館の Bicen 氏等の踏査が行はれてゐる。

（註七）Ricent 天津北强博物館の古生物學的考古學的事業

（註八）北支方面では北京の東房山に於て箱式棺の實在を報ぜられてゐるが副葬品の檢出なき爲め年代決定に困難を感ずる。

考古學雜誌　第十三卷　第九號　今西龍氏「支那の一古墳に就きて」

（註九）A. M. Tallgren : Collection Tovostine des antiquités Minoussinsk Concervez, chez le Dr. Karl Hedman à Vesa.

猶 Minoussinsk 附近の考古學的調査の一般は梅原末治博士の「古代北方系文物の研究」中に收められた「ミヌシンスク地方に於ける古代金屬文化の種別化試論」に於て見られ、各種葬法の發展を覗むる事が出來る。

（註十）A. M. Tallgren : L'époqne dite d'Ananino dans la Russi orientale.

（註十一）歐州に於ける箱式棺の記述は多くの概說書に見えるがこゝには左の如きものを參照した。

T. Déchelette : Manuel a'Archaeolagie Préhistorique Celtique et Gallo -Romaine. Vol I.

G. G. Mac. Curdy : Human Origins Vol. II.

（註十二）この稿の石棺を記した英國の考古學地方誌として次の如きものを參照した。

D. P. Dobsoni : Somerset-The country archaeologies

R. E. M. Weeler : Prihistory and Roman Wales